

日中文化交流史

海を渡った画家 〜雪舟

9世紀末に遣唐使が廃止されて以降、500年続いた民間交流の時代は、明朝（1368〜1644年）の成立によって幕を閉じます。モンゴルの支配を脱した明朝は、海外との交流を朝貢のみに限ったため、日中の交流も勘合符かんごふという許可証を得た遣明船だけに制限されることになりました。

遣明船の派遣は、日中間の独占貿易として、室町幕府と寺社、細川氏・大内氏などの大名が共同で行なっていました。なかでも国際貿易都市・博多を拠点とする大内氏は、この貿易によって巨万の富を得ていました。大内氏は、武家には珍しい渡来系を自称する一族で、そのためか、早くから朝鮮や中国との貿易に携わっていました。

1467年、この大内氏が派遣した遣明船に1人の禅僧が同乗します。後年、中世を代表する画家となる雪舟です。雪舟はこの時、47歳。当時は一介の画僧に過ぎま

せんでしたが、この訪中を契機に才能を開花させ、86歳で亡くなるまで、旺盛な創作活動を続けることになりました。

明の都北京に着いた雪舟は、正使の到着が遅れたために、この地に半年余り滞在する機会を得ます。明朝はその間、この遠来の画僧に破格の待遇を与えました。雪舟が晩年記すところによれば、彼はここで当時の宮廷画家・李在らが伝えていた彩色や墨使いの技法を学んだといえます（『破墨山水図』自序）。

東京国立博物館には、この李在と中国滞在中に雪舟が描いた2幅の山水図が伝わっています。

雪舟とともに明に渡った僧は、こんな逸話も伝えていきます。明の礼部尚書らいふしやうしょ（文科大臣兼外務大臣）姚夔やうゐは、雪舟に礼部貢院（北京の科挙試験場）中堂の壁画の制作を依頼しました。この時、姚夔は、こういったといっています。

「いま入貢する国は30余あるが、貴公ほどの絵は見ることがない。礼部は科挙を行うので、国中の秀才がこの中堂に集まる。その時、私は壁画を指して『ごいごいもりだ。』これは日本の僧・雪舟の作品だ。外国人でさえ、これほどの腕を持つのだ。お前たちも学業に励み、この域に達せよ」と

（呆夫良心『天開図画楼記』）。

こうして、中国絵画の技法と、画家としての自信を得た雪舟は、帰国後、国宝「山水長巻」に代表される多くの名画を生み出したのです。

明朝の宮廷画家・李在の「山水図」



雪舟が中国滞在中に描いた「四季山水図（夏）」

